# 第３章　都市化による都市郊外地域の環境と社会の変化
## ―神戸市西区伊川谷町生田地区在住の夫妻への聞き取り調査から―

神戸学院大学人文学部人文学科現代社会領域
矢嶋　巌
神戸学院大学人文学部人文学科人間と社会コース
2014 年度人間と社会基礎演習（矢嶋ゼミ）履修生

2011 年度から開始された、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による神戸学院大学地域研究センターの研究プロジェクトでは、大学と地域との協働を謳い、大学生・大学院生に地域の中で様々な協働を経験させ、新たな現場教育を行なうことを研究内容に掲げて研究を行なった（矢嶋・神戸学院大学人文学部人文学科人間環境コース 2011 年度人間環境学演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生 2012、矢嶋・神戸学院大学人文学部人文学科現代社会領域 2013 年度現代社会専攻演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生 2014）。

2013 年度の第 3 セメスターゼミにおける研究では、おもに「都市郊外」のテーマに基づき、大学周辺において踏査を中心としたフィールドワークを実施し、その取り組みについては矢嶋（2014b）で報告した。2014 年度の第 3 セメスターのゼミでは、これまでの研究で構築された研究基盤に基づいて、引き続き大学周辺において踏査を中心としたフィールドワークを試みた。

対象とした地域は、神戸市西区伊川谷町有瀬の生田地区で、高度経済成長期に都市化が進展する前は、都市近郊農村の姿をとどめていた。また、近世に開削された農業用水路である伊川堀割が通っていた地区であり、今も部分的に水路の形状を保ったまま痕跡を残し、また、古くからの住民の記憶の中にもその姿をとどめている（図 1）。

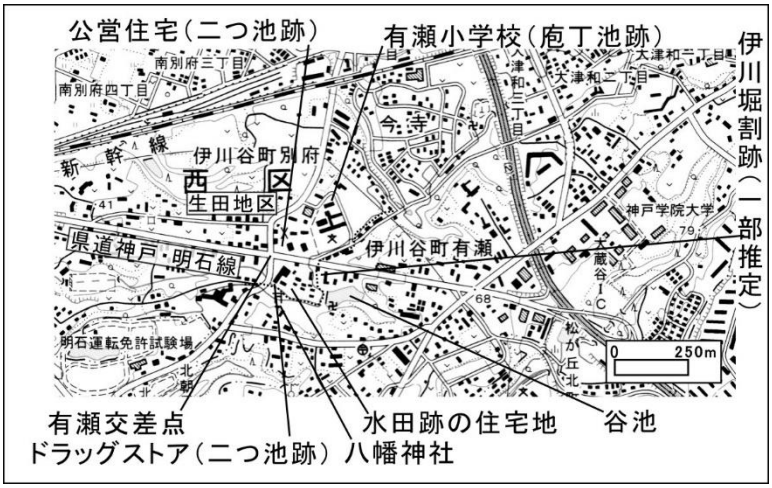


**図１　有瀬生田付近の概要**

注：伊川堀割跡については、県道神戸・明石線から谷池の堰堤を経て八幡神社にかけての部分などで、現在でも遺構が残る。

資料：国土地理院 25000 分の 1 地形図「須磨」（2005 年更新）に加筆

今回、生田地区に生まれ育ち、伊川堀割が機能していた頃を記憶している山中章氏、そして結婚後生田に住んできた妻の卯月氏に、聞き取りをする機会を得た。そこで、第 3 セメスターの 2014 年度人間と社会基礎演習（矢嶋ゼミ）を履修する 2 回生ゼミ生 16 名を、環境、生活、人生、社会の 4 班に分け、質問項目を作成させ、全員による議論を経て確定させ、それを元に 2014 年 7 月 8 日の演習時間内に、山中氏宅前において、班ごとに聞き取り調査を実施した（写真 1）。本報告は、環境（城崎温泉環境班）、生活（SKE 班）、人生（尽誠班）、社会（社ガール班）の 4 班がまとめた聞き取り結果を掲載し、取り組みの報告とするものであ

る。学生が聞き取り結果をまとめ、山中章氏の了解のもと、本報告書に掲載した。学生による記載ゆえ、要素の欠落もなくはないが、内容については矢嶋がチェックを行なっており、その責を負う。

なお、質問項目の検討時には、事前に筆者が山中夫妻から簡単に聞き取りをした内容をもとに、各班にそれぞれキーワードを伝え、質問項目を考えるための呼び水とした。その際、環境班では、木と利用、生物、開発、農業用水（水路・溜池）を示した。また、生活班では、家、買い物、風呂、食事（外食）、ペット、服装を示した。また、人生班では、仕事、結婚、行事、旅行を示した。社会班では、有瀬の風景、神社、子供の遊び、言い伝え、交通手段を示した。

「遊び」のある班名については、学生どうしの融和を図るために最初に班で考えさせたものであるが、一貫してこれを用いる。各章の題目以外、書式の統一性がないが、これも学生自らが工夫するための「遊び」と受け止めていただきたい。

**写真１　山中章氏、卯月氏への班ごとの聞き取り**
2014 年 7 月 8 日矢嶋巌撮影

なお、山中夫妻からの聞き取り内容には、機能していた頃の伊川堀割の様子が描写されている。伊川谷堀割についての研究は多くはなく、公刊されている記録も少ない。地域の歴史として、堀割の変遷や地域住民の暮らしとの関わりなどについて明らかにし、記録として残していく必要があることを記しておく。

本研究において多大なご協力を給わった山中章様、卯月様に、心より感謝申し上げます。

（矢嶋　巌）

＜文献＞

矢嶋 巌・神戸学院大学人文学部人文学科人間環境コース 2011 年度人間環境学演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生 （2012）「都市近郊農村のよりよい生活環境を目指して―兵庫県加古川市西神吉町鼎を事例として―」神戸学院大学地域研究センター明石グループ編『平成 23 年度研究成果報告書＜地域研究センター明石グループ＞』神戸学院大学地域研究センター，pp.33-64

矢嶋 巌（2014a）「地域研究分野の基礎演習におけるフィールドワークの試み―兵庫県明石市東播海岸の環境把握―」神戸学院大学地域研究センター明石グループ編『平成 24 年度研究成果報告書＜地域研究センター明石グループ＞』神戸学院大学地域研究センター，pp.48-61

矢嶋 巌（2014b）「地域研究分野の基礎演習における大学周辺でのフィールドワークの実践―神戸市西区伊川谷町有瀬・長坂地域の環境把握―」神戸学院大学地域研究センター明石グループ編『平成 25 年度研究成果報告書＜地域研究センター明石グループ＞』神戸学院大学地域研究センター，pp.145-159

矢嶋　巌・神戸学院大学人文学部人文学科人間環境コース 2013 年度現代社会領域 2013 年度矢嶋ゼミ 3 回生（2014）「都市近郊地域の安心安全に関する研究―加古川市西部地域を事例として―」神戸学院大学地域研究センター明石グループ編『平成 25 年度研究成果報告書＜地域研究センター明石グループ＞』神戸学院大学地域研究センター，pp.109-141

# 1. 山中家周辺の生活環境について

班名　城崎温泉環境班
班員名　　松下　和裕
森山　由貴
藤本　昂司

１．はじめに

私達は 2014 年 7 月 8 日に有瀬の地域研究のために有瀬生田地区に在住する山中夫妻について取材をした。

神戸学院大学が立地する有瀬周辺は、神戸学院大学が設立される 1966 年以前から 2014 年現在まで環境、地理共に大きく変化しているため、研究対象として選択した。

私達は戦前より有瀬生田地区で生活していた山中夫妻にスポットライトを当てて、山中夫妻が有瀬生田地区で生活を始めてから、現在までの有瀬生田地区について山中夫妻に聞き取り取材をした。

環境・生活・人生・社会の４分野のうち、当班は環境について取材をした。その結果、今は見ることのできない有瀬生田地区の昔の環境を鮮明に知ることができた。

写真 1：取材中の山中夫妻と班員

２．山中家の生活環境

(1) 周辺の様子について

家の周りには、池と山と田と畑しかなかった。かつては、たばこの栽培も盛んだった。当時、生田村には家が 42 軒しかなかった。また、田に水を引くための用水路があり、太山寺の方（神戸市西区伊川谷町前開の石戸神社付近）から水を引いていた。キリン堂や有瀬小学校の位置には池があった。夏は池で泳いだ。池と池を分けるように神明道路がつくられていった。

(2) 動物や虫について

カブトムシやマムシが出た。イナゴは食用にした。用水路には多数の生物がいた。まだコンクリートで固められておらず、メダカ、ドジョウ、シジミ、タニシ、カラスガイ、ホタルが生息していた。シジミ、タニシ、カラスガイは食用にした。ほか、イヌ、ネコ、ニワトリを飼育していた。

(3) 食べ物について

自給自足の生活。なすび、キュウリ、白菜、大根、さつまいも等を育てた。フナ等の魚を池で釣ることもあった。里山で薪を集めてご飯を炊いた。建材になるような木は生えておらず、桜、梅、ニレの木が目立っていた。冬はたき火にも使った。子どもの頃は井戸水が飲み水だった。各家に１基ずつ井戸があった。

写真 2：アルバムを見ながら池の様子を
説明する山中夫妻

３　まとめ

取材から分かったことは、有瀬生田の土地は水と密接に関係していることだ。

江戸時代に、明石藩主松平信之が有瀬周辺に水を引いたことで田が生きた村、ということで「生田村」という名がついたという。

山中さんも用水路に棲むカラスガイやシジミを食料にしていた。飲み水を確保するために一家に一つは井戸があったという。また、当時は一面田畑であり、農作業するのに大量の水が必要であったであろう。そのための用水路であるといえる。

有瀬生田は、土地が大きく開発され、当時の面影を残す場所も少なくなってしまった。

しかし、包丁池やキリン堂に残る貯水池などわずかながら残っている場所も存在する。実際、有瀬生田地区周辺には現在も多くの用水路が流れている。

また、山中さんは夏には池で遊んでいたという。水は大事な資源であると同時に生田周辺に住む人々

の交流の手段となり得たのではないだろうか。

謝辞
「山中家の生活環境について」は、山中夫妻への取材を基にしたものです。
この取材を行うにあたり、山中夫妻に多くのご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

2014 年 7 月 21 日　　城崎温泉環境班一同

# 2. 山中　章氏・卯月氏聞き取りフィールドワーク報告書

神戸学院大学　人文学部人文学科　矢嶋ゼミ２回生
SKE4(生活スタイルいい感じの４人)班　井上　瞬
佐藤　郁菜
田中　直人
山階　佳奈

１．はじめに

神戸市西区伊川谷町有瀬の生田地区に在住の山中章氏・卯月氏夫妻に、昭和期から平成期にかけて、生田地区についてインタビューを行った。我々の班は、山中夫妻が過ごした昭和期の生活の様子を質問し、その内容をまとめたレポートを作成した。

２．当時の生活

(1)　山中夫妻について

山中章氏は 72 歳。昭和 17 年生まれで、生田地区には 69 年間住んでいる。山中卯月氏は 71 歳。昭和 18 年生まれで神戸出身。24 歳で章氏と結婚し、25 歳の時に生田地区に移った。2 人の子どもを持つ 4 人家族であったが、現在は 2 人暮らしだという。

(2)　食生活について

章氏の子ども時代について、基本的に自給自足の生活であったと話してくれた（写真 1)。サツマイモ、米を主食としていたという。食用として飼っていた鶏を正月にご馳走として食べたそうだ。大切に育てた鶏を最終的にさばいて食べていたため、章氏はトラウマで今でも鶏を食べることができなくなってしまったという。

写真 1：食生活について話す章氏

写真 2：アルバムに入った写真を説明する卯月氏

家の周りには川が流れていたそうだ（写真 2)。カラスガイ、タニシがとれ、中でもタニシは天ぷらにして、イナゴはそのまま焼いて、醤油をつけて食べていたそうだ。また、現在家の側には畑がある。これはバブル期に購入した土地だという。主にスイカ、サツマイモ、キュウリ、なすび、苺、大根を育てている。

(3)　買い物事情について

主に伊川谷にできたスーパー、現在のキリン堂（以前は JA であった）の向かいにあった店で食料品を買っていた。

衣料品は、明石にあったダイエーに広告を見て買いに行っていたという。明石には基本的に自転車を

利用していた。明石に行くことを「まちに行く」と表現していたという。三宮方面へはほとんど行くことはなかった。章氏は青年の時に人命救助による感謝状を受けるために初めて三宮に出向いたそうだ。その時に三宮の大きな建物が立ち並ぶ街並みにとても驚いたと語ってくれた。

写真 3：めんこやビー玉を紹介する章氏

(4)　子ども時代の遊びについて

めんこを「べったん」、ビー玉を「ラムネ」、石を飛ばすパチンコを「いっしゃり」と呼び、友達との外遊びをしていたという。遊び道具は使い込まれてはいたがどれも大切に保管されているようだ(写真 3)。

ふるさとの良さについての質問に対して、第一にともだちの存在をあげていたことからも、章氏の子ども時代の人間関係がうかがえるようだった。

３．まとめ

山中夫妻からのインタビューにより、山中夫妻の過ごした昭和期の生田地区の生活の様子を知ることができた。平成生まれの我々にはなじみのないことばかりで新鮮な思いをすることができた。

また、現在と子ども時代を比較してどう思われるかという質問に対して、「そりゃあ今の方が便利だよ」とおっしゃっていたのが印象的だった。

# 3. 2014 年 7 月 8 日フィールドワーク報告書（人生）

尽誠班

神戸学院大学 人文学部人文学科 矢嶋ゼミ 2 回生
上村高史　三村賢蔵　三橋昂生　浦川夏美

1. はじめに

本研究の対象地域は神戸市西区伊川谷町有瀬の生田地区である。この地域は、西区の東南部に位置しており、昔から米作りが行われていた。近年では、第二神明道路の建設や大規模な区画整理が進み、急激な都市化と同時に農地の宅地化が進んでいる。

写真 1：現在の第二神明道路のようす（大蔵谷 IC 付近）

2. 山中さん夫婦について

生田地域に住んでいる山中章さん（72）と卯月さん（71）の夫婦に聞き取り調査を行った。章さんは生まれも育ちもこの地で、警察官だった。息子が 2 人いるが、現在は卯月さんと 2 人暮らし。

写真 2：人生について話す章さんと卯月さん

3. 暮らしについて

神戸学院大学ができるまでは明石高校までしかバスがこないことから、そこまでは歩いたり、自転車やバスで明石まで行っていた。そのことが「街へ行く」というようなちょっとした遠出だった。

4. 子供の頃の遊び

遊び場という所が無かったので、神社でパチンコ、ビー玉転がし、メンコなどをしていた。正月には凧上げをしていた。

遊び道具に方言が使われており、パチンコは「石ヤリ（いっしゃり）」、メンコは「べったん」というように呼ばれていた。夫である章さんは現在でもそのような遊びを保存するための活動を行っている。

写真 3：メンコをする章さん

写真 4：メンコ（左）とビー玉（右）

5. 2 人の出会い、結婚式について

友人から誘われたイチゴ狩りがきっかけで知り合い、結婚にまで至った。

2 人が結婚する頃に高島台に式場ができたが、式は家で行った。宗教的には神道の式であった。また、ドレスではなくお色直しまですべて着物だった。

6. まとめ

今回の調査で、山中夫妻のこれまでの人生について知ることができた。

また、現在では開発されているために昔の面影はないが、昔からの友人が多く、人間関係が良いと話されていた章さんのようすから、有瀬の魅力と章さんのふるさとを思う気持ちを知ることが出来た。

# 4. 2014 年 7 月 8 日フィールドワーク報告書（社会）

神戸学院大学人文学部人文学科　矢嶋ゼミ 2 回生
社ガール班：小嶋咲子/大森あかり/風林咲紀

## はじめに

2014 年 7 月 8 日に、山中章・卯月夫妻に、有瀬生田地区の社会について聞き取り調査を行った。

## 1. 交通手段の変遷

現在、有瀬生田地区周辺の公共交通機関は路線バスが占めている。山中氏によると、昔の明石への行き方は、生田地区から明石高校まで徒歩、そこから明石行のバスに乗車していた。1966 年に神戸学院大学が設立されたことで、生田地区周辺にも路線バスが通るようになり、バス一本で明石に行くことが可能になった。また、三宮への行き方は、明石から現在の JR である当時の国鉄を利用して、三宮駅まで電車移動していた。しかし、山中夫妻共に、明石や三宮に出掛けることは稀であった。

日常生活範囲での交通手段については、山中氏によると、子供時代の主な移動手段は自転車と徒歩であったという。1960 年代頃から自動車が普及し始めた。近所では、オート三輪を所有する人もいた。当時、高校生だった山中氏は、学校までは徒歩で通学していた。

卯月氏によると、買い物に行く際は、子供を乗せた乳母車を押して、近所の八百屋や太寺のスーパーマーケットに出かけていた。

現在の生田地区で見られなくなった交通手段に牛が引く荷車があった。農村地帯だった頃、近隣の農家は農耕用に牛を飼育していた。また、牛は物資を運搬する役目も果たしていた。

## 2. 有瀬の社会的特徴

有瀬生田地区では、かつてから、生田八幡神社が象徴的なものとされていた。山中さんが生まれる前の 1938 年に瓦葺になったそうだ。この生田八幡神社では、1 月 14 日に恋の祭りとして若い男性たちが木を抱きながら行うサッサイ祭りや、1 月 19 日には厄を取り払うための厄神祭り、そして 10 月には獅子舞が村全体を歩き、祝儀を集める秋祭りが行われていた。しかし、住宅が増えたため現在は行っていないという。

有瀬生田地区では、結婚をしたら嫁（養子）の披露として、正装を着て顔合わせをするという習慣があった。これは主に、長男が行うことが一般的とされていた。

## 3. 有瀬の開発と生活インフラの向上

有瀬が開発され出したのは神戸学院大学が設立された 1966 年からのことである。大学が建設されるとともに、交通の便も良くなり、それまで自転車や徒歩での移動だったものが、バスの普及により随分と移動しやすくなったという。それ以前もバスの利用はあったが、現在のようにバス停が点々とあるというわけではなく、県立明石高校のあたりまでは徒歩で行き、そこからバスを利用していた。また、今でも学生向けアパートが多く建ち並んでいるが、キリン堂の辺りは学生寮が非常に多かったのだという。

電話が自宅に設置されたのは、昭和 50 年代のことだ。それ以前から既に普及していたが、一軒一軒に設置されていたわけではなく、ある程度の範囲ごと、地区ごとに電話が一本設置されているのみだった。当時は、消防など必要に迫られた時に電話を使う程度だったので、電話が自宅になくても不便なことはなかったという。唯一有瀬生田で電話が置かれていたのは、象徴的な場といえる生田八幡神社の入口にある煙草組合だった。

また、電気が普及し始めたのは 1950 年のことである。

生活用水は、近くにある井戸を利用していた。また、山中氏の家のそばには用水路が通っていた。用水路は、農業用水など様々な目的に用いるためのもので、伊川用水から離れた場所に引くために造られたものをいう。このことから、井戸や用水路の水を使って生活していたことが分かる。ガス普及以前（恐らく山中氏が少年時代の頃）は、近くの里山から枯れ木や落ち葉などを拾い集めてきて、それを燃やして火をつけていた。

普及した年代が早い順に並べると、おそらく電気、水道、ガスということになる。

写真 1　山中氏宅付近の用水路跡の様子

## おわりに

山中夫妻のご協力により、昭和時代の有瀬から現在の有瀬までの社会の変遷について知ることが出来た。

最後に、山中章氏、卯月氏は、今と昔の有瀬を比べて「今の有瀬のほうが便利だから、今の暮らしに満足している」と話すが、その顔は昔なつかしい有瀬の姿に思いを馳せているようであった。